

共有知識とコミュニケーション的行為

——共有知識のパラドックスと、そのコミュニケーション論的解決——

岡野 一郎

ハーバーマスの社会理論の中心は、「コミュニケーション的行為」と「戦略的行為」の対比にある。ハーバーマスによれば、戦略的行為は孤独な主体による環境の操作であり、これは近代資本主義社会を特徴づけるものである。それに対してコミュニケーション的行為は、そのような孤立した主体を想定せず、あらゆる認識、行動を、他者との相互行為、相互主観性に根ざしたものとして捉えるものである。本稿では、語用論で問題となってきた共有知識のパラドックスに、コミュニケーション的行為の理論を当てはめることを試みたい。共有知識のパラドックスとは、人間のコミュニケーションにおいて、話し手の意図や知識が、参加者間で無限に反射する現象である。しかし、これがパラドックスであるのは、我々が、意図や知識を、孤立した主体によって抱かれたものとして前提しているためである。我々はむしろ、我々人間のもっている意図(欲望)や知識は、コミュニケーションに先立って前提されるものではなく、コミュニケーションのなかで絶えず相手から確証を得ていくものであると考えるべきである。

私たちは、自分のまわりの世界について、様々な知識を持っている。そしてそれらの知識は、大方、社会的な知識でもある。すなわち、他者と分け持たれた知識である。それでは、私たちの持つ知識は、いったいどのような形で社会と関わっているのだろうか？私たちは生まれてから成長するまで、親、教師など様々な人たちから知識を学んでくる。その中には社会的な役割についての知識も含まれるだろうし、また、知識の獲得過程における権威、権力といった問題も顔をのぞかせてくるだろう。しかし、私たちの知識が社会的なものであるということには、そのような知識の獲得過程に関する客観的な事情だけではなく、もっと根本的な意味合いが込められているように思えるのである。本稿では、いわゆる「共有知識」の問題を取り上げることから、「知識の社会性」を解明するため

の別の手がかりを見いだしたいと思う。

(1) 会話のコンテキストと共有知識の問題

コミュニケーションが円滑に行なわれるためには、話し手が述べている言葉が意味しているものを、聞き手は推論できなければならない。たとえば話し手がある人物に言及した場合、その名前が誰を指すかを、聞き手も知らないで、その会話は成立しないであろう。つまり、コミュニケーションが成立するためには、ある種のコードないしコンテキストが、話し手と聞き手の間で共有されていることが必要なのである。話し手がある内容・概念を encode して伝達し、それを聞き手が受け取り、decode する。そしてそのようなコードは共有されている。これがコミュニケーションの一般的なモデルであ

った。しかし、このようなモデルは奇妙なパラドックスをもたらすことが明らかになった。コミュニケーションが円滑に進むためには、当事者の間であるコンテキストについての知識が共有されているだけでなく、その共有されているということについての知識もまた、当事者間で共有されていなければならない。

ここでは、デイヴィッド・ルイス [Lewis 1969: 5,52] にならって、次のような例を考えてみよう（ただし、これはコミュニケーションというよりは、ゲーム論的な行為調整の例であるが）。私はあなたと、ある喫茶店で待ち合わせをしている。この場合、私は当然、その喫茶店を知っていなければならないが、それだけではなく、あなたもその喫茶店を知っていなければならないし、そのことを私は知っていなければならないだろう。だが、それだけでは十分ではない。もしかしたらあなたは、私とその喫茶店を別の喫茶店と間違えていると思うかもしれない。だとしたらあなたは気をきかせて、そちらの喫茶店に行ってしまうだろう。これでは困る。したがって、私は、私とその喫茶店を知っているということを知っているということを知っていなければならない。それだけでは、今度あなたのほうが喫茶店を間違えていると、私は思っていると（本当は思っていないのに）、あなたは思うかもしれない。この場合、あなたは、自分が間違えていると思われることを不満に思いつつも、私の期待にあわせて別の喫茶店に行くかもしれない。これでは困る。したがって、私は、あなたがその喫茶店を知っているということを知っているということを知っていなければならない……。

かくして、喫茶店についての知識は、私とあなたの間で無限に反射し続けるのである。我々

の脳のニューロンは、数の上でも、使う時間の上でも、有限であるから、このような無限連鎖は生じるはずがない。それにもかかわらず、わたしたちはふだん大した支障もなく喫茶店で待ちあわせることができるのだ。

(2) 話し手の意図と共有知識の問題

さて、これと似たパラドキシカルな事態が、別の方面からも登場してきた。それは、言語哲学者のポール・グライスが「非—自然的意味 (nonnatural meaning)」と名付けたものに由来している。グライスによれば、自然的意味とは、たとえば人体のこれこれの症状はその人がこれこれの病気であることを意味する、といったように、客観的な推論を導くものである。それに対して、非—自然的意味は、人間がコミュニケーションの中で用いるものであり、自然的意味とは性質を異にしている。グライスは、「非—自然的意味」に、次のような定義を与えている。

「Aはxによって何かを非自然的に意味した」、は、(大まかに言って)「Aはxの発話が、その意図の認知によって、聞き手の側にある効果を生み出すことを意図した」、と同値である。[Grice 1957:385]

グライスは後に、これをさらに次のように精緻化した。

「Uはxの発話によって何かを意味した」は、次の場合にのみ、真である。

Uは、ある聞き手Aに対して、次のことを意図してxを発話した。

(1) Aが特定の反応rを生み出すこと。

(2) Aが、Uが(1)を意図していると、考え

る（認識する）こと。

(3)Aが、(2)を充たすことを基盤として1を充たすこと。[Grice 1969→1989:92]

例えば、私が誰かにタバコの火を貸してくれるようにたのむ場合、私は何を意図しているであろうか。単にタバコの火を借りようと意図するだけではだめである。これでは相手から無理矢理ライターをもぎとって火をつけるのと変わらなくなる。私はさらに、その「火を貸してほしい」という意図(1)を相手が認識すること(2)によって、当の目的を達しよう(3)と、意図することによって初めて、相手にタバコの火を借りていると言えるであろう。さて、ストローソンは、この定式化が困難なパラドックスを抱えてしまうことに気がついた [Strawson 1971:447]。すなわち、グライスのこの図式によれば、早い話が話し手は「タバコの火を借りたい」という意図を、聞き手と共有することをめざすのであるが、このことは、「共有をめざす意図の共有をめざす意図の共有をめざす意図の……」という無限後退を引き起こしてしまうのである。次の例を見てみよう。

宏と悦子は喧嘩をした。悦子はなんとかして宏と仲直りしたい。でも直接宏に言うのはためられる。そこで、日記に「宏と仲直りしたい」という文章を書き、宏の目につくようにテーブルの上に置いておいた。

悦子は宏に仲直りしてほしいという意図(1)を持っている。そして、その意図の宏による認知(2)によって、宏が仲直りしてくれることを意図している(3)。しかし、彼女はそのような意図(3)を宏に知られたくない。このような事

態は、タバコの火を借りるといったような、一般的な会話とはおよそかけ離れていると言えよう。普通の会話が成り立つためには、さらに、(4)聞き手が話し手の意図(3)を認知することによって意図(1)を満たすことを意図しなければならないと思われる。

しかし、それだけで十分だろうか？状況を若干変更しよう。

「宏と仲直りしたい」という文章を書いた日記をテーブルの上に置いたとき、悦子は宏が自分を見ているのに気がついた。悦子はこう考える：宏には、私がわざと日記を置いたことがばれてしまったらしい。だからもう、独白に見せかけて、仲直りをしたいという意図を宏に伝えることはできない。でも、宏は、そのばれたということに私が気がついていないと思っているはずだ。ようし、思い切ってこのまま日記を置いておこう。宏はもちろんこれを本当の日記とは思ってくれないだろう。でも、私の「ばれていることを知らずに行なうけなげな演技」に免じて、仲直りをしてもらえるかもしれない。直接頼むよりもそのほうがましだ……。

悦子は宏に仲直りしてほしいという意図(1)を持っている。そして、その意図の宏による認知(2)によって、宏が仲直りしてくれることを意図している(3)。また、そのような意図(3)を、「演技」の形で宏に伝えようとしている(4)。しかし、彼女はそのような意図(4)を宏に知られたくない。果たしてこれがいわゆる一般的な会話だと言えるだろうか？会話が成り立つためには、さらに(5)聞き手が話し手の意図(4)を認知することによって意図(1)を満たすことを意図

しなければならない。

しかし、それだけで十分だろうか。また状況を若干変更しよう。

悦子は日記をテーブルに置こうとしたとき、宏が自分を見ているのに気がつき、あわてたそぶりをしてしまった。その悦子のあわてたそぶりを、宏が見たことは明らかだ。悦子はこう考える：宏には、私がわざと日記を置いたことがばれてしまったから、もう、独白に見せかけて、仲直りをしたいという意図を宏に伝えることはできない。それだけでなく、宏には、そのばれたということに私が気がついているということもばれてしまった。しかし、そのことを私が知っているということは、まだ宏には知られていないはずだ。ようし、思い切って、このまま日記を置いておこう。宏はもちろんこれを本当の日記とは思ってくれないだろう。また、私がばれていることを知らずにけなげな演技をしているとも思っはくれないだろう。しかし、私がばれていることを知らずにけなげな演技をしていると宏に思わせようとしている、と、宏は思ってくれるのではないか。そしてそこまで自分がやることに免じて、仲直りをしてくれるかもしれない。直接頼むよりもそのほうがまだ……。

悦子は宏に仲直りしてほしいという意図(1)を持っている。そして、その意図の宏による認知(2)によって、宏が仲直りしてくれることを意図している(3)。また、そのような意図(3)を、「けなげな演技」という形で伝え(4)、その意図をも宏に伝えようとしている(5)。しかし、彼女はそのような意図(5)を宏に知られたくない。

果たしてこれがいわゆる一般的な会話だと言えるだろうか？ 会話が成り立つためには、さらに、(6)聞き手が話し手の意図(5)を認知することによって意図(1)を満たすことを意図しなければならない……。

果たしてこのような事例を永遠に積み上げていけるものか、私には解らない。ただ、どこまで積み上げても、おそらく face to face の会話と同じイメージの代物にはならないことは、おぼろげに理解できる。最初に示した喫茶店の例と、グライスに由来する問題とは、一応区別されるべきであろう。一方で問題になっているのは、個別的な事象（喫茶店等）についての知識であり、もう一方は話し手の意図についてはかなり根源的な知識である¹¹⁾。前者の例は、デイヴィッド・ルイスによって、‘common knowledge’ と名付けられ[Lewis 1969]、後者の例は、ステイーヴン・シッファーによって、‘mutual knowledge’ と名付けられた[Schiffer 1972]。だが、ここでは取り合えず、この両者を「共有知識」の問題として、一応並立して論じてみたい。

3 クラークとマーシャルによる解決案

クラークとマーシャル[1981]は、話し手と聞き手が直接出会っている(co-presence) という外界の情報の共通性、言語の共通性、そしてある種の知識の共同体（慣習）の存在によって、これを解決しようとした。例えばある男女が共通の対象を眺めているとき、男は女がその対象を見ていることを知っており、そのことを女も知っており、そのことを男も知っており……というように、無限の遡及が可能になる。また、直接見ているもの以外については共通の知識のバックグラウンドがあることによって、知識の

共有が可能になるというのである。

しかし、このような解決は十分なものではない。まず、同じ対象を共有していたとしても、それについての「意味づけ」は各自異なる可能性がある。そのため共同体（慣習）というものが共有される必要が出てくるが、そうすると今度はまた、それぞれがある共同体に属しているということについての共有知識が問題になってしまうだろう。

4 スペルベルとウィルソンによる解決案

スペルベルとウィルソンは、別のアプローチをとった[1982,1986]。彼らは、そもそも共有知識の存在自体を不必要と考えた。「共有知識は理解のための必要条件であるという形式的な議論は、ただ完全な理解にのみ当てはまるにすぎず、日常生活においてまったく十分であると感じられるような不完全な[理解の]形態には当てはまらない。」[1982:69] まず、会話の参加者に共有されるべきなのは知識ではなく、自分の環境の中から意義深く現われてくるもの、すなわち manifest なもの、である。そしてこれに関わるのが「文脈」と「レリヴァンス」である。人間はその時その時の文脈のなかで行動する。会話もまた然りである。そしてその文脈の設定を左右するのがレリヴァンス（関連性）である。

そして彼らは、コミュニケーションを、聞き手の環境に対する認識に、話し手が影響を与えようとする行為として捉える。その場合、話し手は、自分のその意図を相手が知ることを、そのような目的の手段として使う場合もある。その手段が有効なのは、自分のそのような意図を相手に伝えることが、相手の環境認知の改変をより容易にし、また、社会関係を円滑にする

(さらなるコミュニケーションを可能にする)場合である。このようなコミュニケーションをスペルベルとウィルソンは、ostensive-inferential communication と呼ぶ。

スペルベルとウィルソンは、このようなコミュニケーションにおいて話し手が持つべき意図を、ふたつに分けている。ひとつは、「伝達意図」(informative intention) である。伝達意図とは、「ある一連の(環境についての)推定を、聞き手に manifest に、あるいはより manifest にしようとする」意図である[1986:58]。もうひとつは、「会話意図」(communicative intention) である。会話意図とは、「話し手が、その伝達意図を持っているということ、聞き手と話し手に mutual に manifest にしようとする」意図である[1986:61]。彼らはこのふたつでコミュニケーションは十分成り立つと考える。

しかし、このようにコミュニケーションを捕らえることには、いくつかの疑問が残る。まず、共有されるものを、知識ではなく manifest なものと言ったところで、事態は大して変わらないのではないだろうか。彼らは、言語的な知識の代わりにレリヴァンスとか文脈とかを持ち出すことによって、共有知識という厳格な条件を和らげようとしているようだ。「神秘的で説明を要するのは、[会話の]失敗ではなく成功のほうである。」[1986:45] 「'manifest'は'known'や'assumed'よりもより弱いので、'mutual knowledge'や'mutual assumption'と同様の心理学的な疑わしさを免れた、mutual manifestnessという考えを展開できることを、我々は示そうと思う。」[1986:41] しかし、今度は今度で、レリヴァンスの共有、文脈の共有という問題が顔を出してくるのではないだろうか？ スペルベルとウィルソンは(クラークとマーシャルもそうだが)、共有知識の問題と、文脈(コンテク

スト)の複雑性の問題とを同一のものとして捉えているようである。したがって、共有知識を持つということは、完璧な文脈を持つということと同じになる。だが、共有知識の問題とは、その知識自体が曖昧か明瞭かという問題とは別なものではないだろうか？文脈状況をどれだけ捨象したとしても、「あることを私が曖昧に知っているということを、あなたが曖昧に知っているということを、私が……」という事態は、いくらでも見つかるはずである。

5 コミュニケーション的行為と共有知識

話は出発点に戻ってきた。共有知識の問題は、レリヴァンスであれ、文脈であれ、言語的な知識であれ、非言語的な知識であれ、様々なコミュニケーションの中に現れてくる。そして、その共有されるべきものの中心には、話し手の「会話意図」という、コミュニケーションにとって根源的な意図がある、と考えられよう。しかし、なにかが共有されるとすれば、それは無限後退を引き起こし、我々の現実に関わなくなるのである。

ここで考えてみたいのは、コードモデルであれ、意図モデルであれ、両者は人間の知識についてのあるイメージを前提としている、ということである。それは、我々の持つ知識は、「今、世界はこうなっている」「今、誰それはこのように考えている」というように客観的な知識である、という前提である。スペルベルとウィルソンの場合に典型的なように、それはコミュニケーションを、相手にある影響を及ぼそうとする行為として捉えている。それとは異なった行為のタイプ、ないし、個人の他者への関わり方のタイプを考えることによって、共有知識の問題に対処することができるかもしれない。以下

では、ハーバーマスのコミュニケーション理論をこの問題に援用することによって、このことを説明してみたい。

* * *

ハーバーマスによる、「戦略的行為」と「コミュニケーション的行為」の区別は、すでによく知られている。そしてこのふたつの区分は、ハーバーマス自身によっても、一般的にも、多分に道徳的な色彩を伴って用いられることが多い。だが、コミュニケーション的行為を、戦略的行為から区別する重要なメルクマールは、それが「他者の批判に対して開かれた行為である」という点にある。このことを、ハーバーマスは「妥当請求」という概念によって端的に表わしている。すなわち、コミュニケーションにおいて、その参加者たちは、ある発話を行なう際に、常にその相手に対して、その発話に含まれているある性質についての判断を委ねるのである。すなわち、その発話に含まれている事実判断は正しいか？文法は正しいか？自分は社会的に妥当な方法で会話をしているか？私の気持ちは真摯なものとして受け取られるか？……といった具合である。そして、「戦略的行為」と「コミュニケーション的行為」を区別するメルクマールは、「誠実性(Wahrhaftigkeit)」の妥当請求が掲げられているかどうかである[Habermas 1979:41]。ところで、ハーバーマスはコミュニケーション的行為を、発話行為論で言う「発語内行為」とおおよそ同一視しており、また、ストローソンは発語内行為とグライス流の意味論を結びつけている[Strawson 1964:449]。しかも、誠実性の妥当請求において主題となるのは話し手の意図であるから[Habermas 1979:48]、これはグライスの問題にまさに直結してくるのである。

通常の会話においては、おおよそこのような

妥当請求は、肯定的に受け入れられる。例えば相手に何かを依頼する場合、それが受け入れられるにせよ、断られるにせよ、それが例えば命令と勘違いされることはなく、おおよそ「依頼」という行為として受け入れられるだろう⁽³⁾⁽⁴⁾。もちろん、だからといって、依頼という行為の条件が社会的に完璧に決まっているわけではない。依頼は常に勘違いされる可能性に開かれている。他者によって否定される可能性がありながら、当面肯定されつつ、会話が進行する。これが、ハーバーマスの描くコミュニケーション的行為の特徴である。

さて、上に挙げた依頼のようなコミュニケーション的行為において、私はまさに依頼の充たすべきルールの妥当性を、相手に対して掲げているのである。その場合、私の「依頼という意図」は、私の依頼が、すなわち妥当請求が、相手によって受け入れられるという事実によって、話し手にとっても確かなものとなる。ここから、ハーバーマスの考える意図の概念と、グライスのそれとが、かなり異なったものであることが理解できよう。グライスにとっては、意図とは、はじめから話し手によって明確に持たれているものである。それに対してハーバーマスの場合、その意図の存在（＝誠実性）そのものが、会話の中で確認されるべき主題なのである。したがって、私の「意図」なるものは、依頼の充たすべきルールによって反射的に構成されるものにすぎないのである⁽⁵⁾。

相手が依頼を受け入れることによって、私は自分のメッセージが相手によって承認されているということを知る。また、依頼が受け入れられない場合でも、それが拒否されることによって、それが依頼であったという事実が相手に受け入れられたということを知り、したがって、私の意図も承認される（拒否は依頼を前提

とする）。ただ、それが例えば命令と勘違いされた場合、そのことによって私はメッセージが（そして意図が）、承認されなかったことを知るのである。ここには意図の反射はほとんど起こっていないが、それでも私は自分の意図を相手に伝えることに成功するのである。

これらのことから逆に、共有知識のパラドックスがパラドックスである理由も明らかになってこよう。このパラドックスがパラドックスであるのは、論者がコミュニケーションを、そして知識というものを、モノログな第三者の視点から見ているためである。すなわち、個人の、世界に関する知識、そして意図を、客観的で一人称的に閉じたものとみなしているためである。しかし、個人の世界に関する知識、そして意図を、すべて他者の批判に開かれている相互主観的なもの、コミュニケイティブなものと考えれば、共有知識のパラドックスは最初から生じないのである⁽⁶⁾。

* * *

以上のように述べるからといって、私は会話への参加者の間で、相手の持つ知識についてのかなり複雑な相互関係が生まれる可能性を、別に否定するつもりはない。始めのほうで挙げた、悦子と宏の例のような事態は、しばしば起こるだろう。この場合、悦子は相手と知識を共有することを拒否している。すなわち、妥当請求を立てることを拒否しているのである。しかし、「日記を書く」「日記を書くふりをする」「日記を書くふりをしているふりをする」……というように、妥当性の請求を拒否し続けるかぎり、我々の知識は自己の内面で堪え難い複雑性をもたらしてしまう。そのような状態はやはり「歪んだ」ものであり、「派生的な」ものだと言わざるを得ないだろう。

あるいはまた、私たちはしばしば会話の中で、

相手が自分を誤解していることに気がつき、それを訂正しようと努力することがある。これは日常的なことであろう。しかし、時によって、私たちは、自分が相手を誤解していると相手に思われていると感じることがある。本当はきちんと相手のことを理解しているつもりなのに、相手から「ちゃんと私のことを理解してよ！」と言われることがある。さらには、私のほうから「ちゃんと僕のことを理解してくれよ！」と言ったところ、「何言ってるのよ！理解してるわよ！」と言われてしまうこともある。このような場合、往々にして、このような誤解をさらに解こうと努力することはさらなる誤解につながり、徒労に終わるものである。経験的に言って、このような「誤解についての誤解についての誤解……」の、いちばん良い解決法は、端的に話題を変えることである。私が相手のことを誤解していないということを示すためのいちばんいい方法は、誤解していない場合ならば成立するはずの会話の流れを実際に作り出すことである。このようなことから、我々のコミュニケーションにおいて、共有知識の反射は、必要どころか、むしろあってはならないことのように思われるのである。

ところで、我々は様々なコンテキストのなかで毎日の生活を営んでいる。家庭のコンテキストについては家族との共有知識があり、仕事のコンテキストについては同僚との共有知識がある。そしてそれらは日々のコミュニケーションを通じて繰り返し確認され続けてゆく。しかし、そのようなコンテキストの複雑性と、共有知識の無限反射の複雑性とは区別しなければなるまい（したがってまた、コンテキストの曖昧さを持ち出して共有知識の問題を和らげることもできない）。我々はそれぞれのコンテキストについて、他者と共有知識を分け持つことができる。

そしてそのようなコンテキストは、おそらく有限である。もちろん、会話の相手との間で、多くの事柄についてコンテキストを共有するほど、会話が円滑になるのは言うまでもない。

また、ハーバーマスのコミュニケーションをめぐる議論は、しばしばその予定調和的な性質が批判される。つまり、ハーバーマスは人間と人間が芯からわかりあえることを前提にしている。彼は他者の異質性を理解していない、というわけだ。しかし、ハーバーマスは完全な合意が（つまり共有知識が）現実には可能だとは一言も言ってはいない。合意とは、現実の会話のなかで、常に先取りされているものであるにすぎない。したがってここには、コミュニケーションの規則があらかじめ客観的に存在しているなどという発想はない。ただ、そうは言っても、ハーバーマスのなかに、コミュニケーション的行為に対する強い思い入れがあることも否めない。たとえばハーバーマスは、近代的なメディア（貨幣・法律）を、そしてシステム（経済・政治）を、戦略的行為が制度化されたものとして捉え、告発する。したがってそれらの連関においては、誠実性の妥当請求は掲げられていないことになる。だが、私たちがたとえば買物をする場合、「ものを買いたい」という自分の意図を相手に伝達する（妥当性を掲げる）ことなしにものを買えるだろうか？そもそもコミュニケーション的行為なしに社会秩序が可能だろうか？⁹⁾ 近代的システムの抱える問題は、コミュニケーション的行為との対比において捉えられるべきではない。むしろコミュニケーション的行為そのものを、現代社会分析の根幹に据える必要があるように思われるのだ。つまり、コミュニケーション的行為を、人間開放のための救世主のごとく見るのではなく、その「当たり前さ」を確認する必要がある。コミュニケー

ション的行為を英雄的な投企のごとく見ることは、ひいきの引き倒しになりかねないのである。

6 今後の課題について

私のまわりに広がる世界は、単に物理的・客観的に成り立っているだけではない。それは、私によって意味づけられることによって、初めて存在する。私の世界とは、私によって主観的に構成された世界であるが、それは同時に他者による承認を前提とした、相互主観的な世界でもある。そして、私の世界に関する知識が社会的なものであるということは、それが単に他者と分かち持たれているということや、それが（親や教師の権力作用などによって）様々な他者から「与えられる」ということだけを意味するのではない。知識の社会性とは、その獲得のされ方や分配のされ方だけでなく、知識それ自体の性質に関わっている問題なのである。

本稿では、共有知識のパラドックスを手がかりにして、私たちの持つ知識のそのような性質をさぐってみた。しかし、何か結論が得られたというよりは、むしろ疑問点や課題が数多くふりかかってきたという気がする。それらのいくつかを挙げて、本稿をしめくりたい。

①本稿では、主観主義的な知識観を批判的に扱った。しかし、私たちの持つすべての日常的知識（言語的・非言語的のすべて）のなかで、どこまでがコミュニケイティブなものなのかは、今だにわからない。そもそもなぜ人間はコミュニケイティブな知識を持つのだろうか。その機能はなんだろうか。ここでは関連すると思われるふたつの問題を挙げるにとどめたい。ひとつは秩序問題である。戦略的行為がホップズ的狀況に関わっていることはおほろげに理解できよう。もうひとつは、自明視された世界の構

成という問題である。私たちは自分のまわりの世界を当たり前のもので捉えることができるが、これは他者の存在によって支えられていると思われるのである。私たちが自明視しているものの代表例として、「わたし」というものがある。自我の一貫性については、私はそもそも疑うことができない。わたしには、わたしがわたしであることを決定できない。私は他者に認められることによって初めて、私であり得るのである。

②また、本稿では、日常的なコミュニケーションについてしか、考察することができなかった。つまり、私たちの持つ知識がその妥当性を維持されていく過程しか見ることができなかった。しかし、より重要な課題は、私たちの持つ知識が、いかに変動していくのかという問題である。ハーバーマスに則して言うならば、それは「討議」(Diskurs)がいかにして可能になるのかという問題である。コミュニケーション論的な視座から見れば、「個人が、新しい知識をまったく個人的に獲得することは可能なのか？」という問いがたてられよう。そしてそれは、コミュニケーションを通じてどのような知識が受け入れられ、どのような知識が排除されるのか、その合理的な基準（クーンらによって開始された、科学の合理性やパラダイム・チェンジの問題）の探求ということになるであろうが、それは今後の課題としたい。

③最後に、本稿でとられたような視点は、現代社会分析のなかでどのように用いることができるかという問題がある。まったくの憶測であるが、私はこれを「競争社会」としての近代観に結びつけたいと思っている。競争とは、すぐれて相互主観的な現象である。それは単に、競争は制度化されているという次元の問題にはとどまらない。競争の目標は、まったく個人的に

選ぶことはできない。それは他者を前提とする。すでに述べたような、生活世界とシステムを対立させるハーバーマスの図式よりも、競争社会としての一元的な捉え方のほうが、近代社会を分析するには適しているように私には思われる。経済だけではなく、政治・科学・愛など様々な面での競争関係を、生活世界レベルとダイレクトに結びつけて考察する道が、ここから開けるのではないだろうか。

注

- (1)このような例は、なにも依頼や約束といった日常的なコミュニケーションだけに当てはまるのではない。意図の無限反射の問題は、芝居をしたり、朗読をしたりする場合でも、同じように起こるのである。私は私の「芝居をする」という意図を相手に伝えることによって、芝居をし、私の「朗読をする」という意図を相手に伝えることによって、朗読をするのである。たとえば、私が芝居の中で人を殺す場合、それが見ている人によって本当の殺人と勘違いされてはたまらないだろう。私は芝居をしようと意図するだけではなく、その意図を相手に伝えようと意図しなければならないのである。そしてこれは、先程の例と同じように、無限後退を引き起こすであろう。
- (2)また、デイヴィッド・ルイスの場合もそうであるが、クラークとマーシャルは、共有知識の無限後退が可能になる条件（対面状況、文化など）があれば、それで問題は解決したと考えている。これは確かにひとつの解決法かもしれない。たとえば私たちは、実際に数えたことなどないにもかかわらず、無限に続く整数や自然数を考えることができる。つまり、ある与えられた少数の命題が、無限の命題を含意すればよいというわけだ。しかし、たとえば数学の様々な定理は、少数の公理から論

理的に導くことができるが、だからといって私たちはすべての数学の定理を「知っている」というわけにはいかないだろう。私たちの共有知識も同じようなものなのかもしれない。共有知識の無限後退が、果たして私たちに「当然のこと」として理解されているかどうかは甚だ疑問である。たとえば、「私があなたを誤解しているとあなたは誤解していると私は誤解している……」という無限の命題は、それを導く単純な命題におそらく還元できるであろうが、このような無限の命題を端的に理解するのは不可能である。

- (3)このような話し手-聞き手の関係は、いわゆる隣接ペア(adjacency pair)において顕著であろう。サククスらによれば、隣接ペアの第二部分の話者は、「その発話のタイプを遂行するだけではなく、そのことによって、先行する順番の語りを第一部分として……理解しているということを提示する。」[Sacks et al. 1974:728] したがって、会話がどのように進行するかは、聞き手が第一部分をどのように解釈するかにかかっている。しかし、だからといって最初の話し手は、自分の発話がどのように受け取られてもかまわないと思いがちじゃべるわけではない。他者の批判に開かれているということは、他者にすべてをまかせるということではないのだ。また、一回の発話が否定されたからといって、ただちに自分の意図が存在しなかったことになるわけではないだろう。私の意図の確認は、むしろ数多くの発話の中から、確率論的に導かれるものと思われる。たとえば、太陽は東から昇って西へ沈むという知識は、毎日の何気ない太陽の観察によって維持されるが、だからといって曇りの日には太陽は昇らなかったということにはならないだろう。
- (4)したがって、妥当請求には‘implicit/explicit’のふたつのレベルがあると考えべきだ。①まず、あらゆる会話において、我々は暗黙のうちにすべ

ての(四つの)妥当請求を掲げている。これは、教授が水を持ってくるようにたのむ事例で示されている。②だが、これとは別に、「命令」「陳述」などのように、妥当請求そのものが明白に現れる場面であろう。このふたつは、次のような関係にあると思われる。たとえば依頼という行為において、まず①において、依頼がまさに依頼であるということが掲げられる。依頼を受けた側は、その依頼を引き受ける場合であれ断る場合であれ、それを依頼という行為として認めたならば、このレベルでの妥当請求は受け入れられたことになるだろう。だが、②のレベルにおいてはこれだけでは不十分であり、依頼が引き受けられた場合にのみ、この明示的な妥当請求は受け入れられたことになるだろう。共有知識の問題に関して特に重要なのは、より根源的な①のほうである。

(5)したがってハーバーマスは、グライスらのようにコミュニケーションの内実を話し手の意図に還元する立場を批判することになる。「言語に媒介された相互行為というパラダイムの概念は、意図派意味論 [=グライス、シフター等] のように、了解を成果に志向して行為する主体間での調整問題の解決として理解させようとする意味論とは、相容れない [Habermas 1981 = 1986:(中)25]。

(6)私の意図とは、すなわち、私の欲望のことである。私の意図が、他者の承認によって初めて意図となるということは、私の欲望が他者の欲望を前提として成り立っているというジラルの議論[Girard 1961=1971]と重なりあうであろう。

(7)誤解を避けるために強調しておきたいが、私はすでに引用した「神秘的で説明を要するのは、[会話の]失敗ではなく成功のほうである」という考えに賛成である。私が本稿で問題としているのは(そしておそらくハーバーマスにとっても肝要なのは)、コミュニケーションが成功するか失敗するか

という問題ではなく、コミュニケーションへの参加者が、コミュニケーションの成功を求めるか求めないかという問題なのである。確かに、橋元も指摘しているように、「我々が、コミュニケーションが成立しているとみなす状況では、……効果意図 [グライスの1の意図にあたる] の実現はまったく不必要」である [橋本,1990:176]。橋元の例を挙げると

a : 外交官試験に合格したの、ワタシ。

b : おまえが? うそだろおー。 [同:176]

この場合、aの、事実を伝え、相手を喜ばせようとする意図は、確かにbによって否定されてしまった。しかし、この場合でも、aは、少なくともコミュニケーションの成功を求めて、発話を行なったであろう。もちろん、共有知識はコミュニケーションが成功するための条件としても、重要な意味を持つ。だが、bによって否定されたとはいえ、aは自分の意図についての妥当請求を掲げたということ、これが重要なのである。

(8)ハーバーマスは、誠実性の妥当請求の不在を、戦略的行為のメルクマールにしておきながら、一方で、戦略的行為を、発語内行為を前提するものとして記述している。「目的論的に行為している話し手は、自分の発語内的目標を……達成しなくてはならない。しかもその際、自分の発語媒介的目標を漏らしてはならない」 [Habermas 1981 = 1986 : (中) 32]。そして、オースティンの場合にも、この傾向はうかがわれるようだ。たしかにオースティンは、発語媒介行為の成立のために発語内行為が必要であるとは言っていない。つまり、理念的には、発語行為(単なる文章の発話)からも発語媒介行為は発生し得る。しかし、実際にオースティンが挙げている発語媒介行為の例は、どれも発語

内行為を前提とするものばかりである [Austin 1960=1978]。ところで西阪は、コミュニケーション的行為はそもそも不可能だとして、次のような議論をしている[1987]。無限に後退したければしてもよいが、通常のコミュニケーションでは、どこかでこの後退はストップするのだ。そこでコミュニケーションは「発語媒介行為 (=戦略的行為)」に道を譲るしかない、と。そこで彼は、「規則の利

用」モデルを提案している。しかし、いかに部分的であれ、発語内行為 (=コミュニケーション的行為) の成立しないところに、果たして社会的な秩序が成り立つのであろうか? 発語内行為の問題、したがって共有知識のパラドックスは、単に「必要ない」といってすませられる問題ではないように思われるのだ。

文献：

- Austin, J. L., 1960, *How to do things with words*, Harvard U.P., = 1978, (坂本百大訳)『言語と行為』, 大修館書店.
- Clark, H., and Marshall, C., 1981, "Definite reference and mutual knowledge," in Joshi, A., Webber, B., and Sag, I. (ed.), *Elements of discourse understanding*. Cambridge U.P.
- Girard, R., 1961, *Mensonge romantique et verite romanesque*, Fernard Grasset. = 1971, (古田幸男訳)『欲望の現象学』, 法政大学出版局.
- Grice, P., 1957, "Meaning," *Philosophical Review* 66.
- 1969, "Utterer's meaning and intentions," *Philosophical Review* 78.
- 1989, *Studies in the way of words*, Harvard U.P.
- Habermas, J., 1979, "What is universal pragmatics?" in *Communication and evolution of society*. Beacon Press.
- 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 2 Bde., Suhrkamp, = 1985, 1986, 1987, (河上倫逸他訳)『コミュニケーション的行為の理論』, 未来社.
- 橋元良明, 1990, 「対話のパラドックス」, 『交換と所有』, 岩波書店, 所収.
- Lewis, D., 1969, *Convention*, Harvard U.P.
- 西阪仰, 1987, 「普遍語用論の周縁 —発話行為論とハーバーマース—」, 藤原保信他編, 『ハーバーマースと現代』, 新評論, 所収.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G., 1974, "A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation," *Language*, 50.4.
- Schiffer, S. R., 1972, *Meaning*, Oxford U.P.
- Searle, J., 1969, *Speech acts : an essay in the philosophy of language*, Cambridge U.P., = 1986, (坂本百大・土屋俊訳)『言語行為』, 勁草書房.
- Strawson, P., 1971, "Intention and convention in speech acts", in Searle, J. (ed.) *The philosophy of language*, Oxford U.P.
- Sperber, D., and Wilson, D., 1982, "Mutual knowledge and relevance in theories of comprehension," in Smith, N. V. (ed.) *Mutual knowledge*, Academic Press.
- 1986, *Relevance*, Basil Blackwell.

(おかの いちろう)